

利用者が感じる山梨大学附属図書館子ども図書室の魅力 — 附属幼稚園児の保護者を対象とした質問紙調査からの考察 —

What kind of points do the Users of Children's Library Attached to the University of Yamanashi Library Find Attractive?

: Discussion Based on a Questionnaire Survey on the Parents of Kindergarten

Attached to the Faculty of Education, University of Yamanashi

塚 越 奈 美* 秋 山 麻 実* 志 村 結 美** 川 島 亜 紀 子**
TSUKAKOSHI Nami AKIYAMA Asami SHIMURA Yumi KAWASHIMA Akiko
小 島 千 か*** 渡 邊 文 代**** 佐 藤 和 裕****
KOJIMA Chika WATANABE Fumiyo SATO Kazuhiro

要約：本研究は、山梨大学附属図書館子ども図書室に利用者はどのような魅力を感じているのかを探るものである。この目的のために、子ども図書室の主な利用者である山梨大学教育学部附属幼稚園児の保護者を対象に、利用状況や利用目的などについてたずねる質問紙調査を実施した。その結果、年中児・年長児の家庭では6割を超える利用があり、利用の主な目的は図書を読んだり借りたりという本に親しむ活動が中心であることが確認された。子ども図書室独自の魅力としては、運営に携わる学生ボランティアとの交流や室内に常備されている折り紙等を使った工作活動が挙げられた。また、子ども同士・大人同士のコミュニケーションスペースとして活用されていることも示され、静かに本に親しむ場でもあり、利用者の交流の場でもあるという2つの機能が共存していることが明らかになった。調査結果を関係教職員と学生ボランティアで共有し、今後の運営の充実につなげていきたい。

キーワード：子ども図書室 附属幼稚園児の保護者 利用状況 利用目的

I. 問題と目的

山梨大学附属図書館子ども図書室（以下、「子ども図書室」とする）は、2002年5月に開設され、2019年に17周年を迎えた。子ども図書室は、大学の地域貢献と学生の実践的学習の場として、週3回（2002年5月から2014年3月までは月曜午前と水曜・土曜の午後、2015年4月からは月曜・水曜・土曜の午後）開室され、運営は主に山梨大学の学生ボランティアによって担われている。全国には鳴門教育大学附属図書館児童図書室をはじめ子どものための図書室を有する大学はいくつかあるものの、その運営を学生が担っているところはみられない（鳴門教育大学児童図書室、2006；児童図書館研究会、2012）。

子ども図書室開設の経緯については秋山（2002）、また開設から10年間の利用状況や学生ボランティアの活動については鳥海・塚越（2013）に詳しい。そこで、本稿では昨年度（2018年度）の開室日数や利用状況を示しながら、子ども図書室の現状について簡単に概観する。昨年度の開室日数は72日、総入室者数は419人、総貸出冊数は398冊であった。図1に示すように、月によって利用者

* 幼小発達教育講座 ** 生活社会教育講座 *** 芸術身体教育講座 **** 山梨大学附属図書館

数および貸出冊数にはばらつきがみられるが、月平均利用者数は34.9人、月平均貸出数は33.2冊、一日当たりの平均入室者数は5.8人となっている。また、2019年3月31日時点の蔵書数は4,685冊である。鳥海・塚越（2013）では、当時の利用者数は年間延べ1500名前後で推移し、蔵書数は2010年度に4,024冊と記載されているため、蔵書数に関しては充実が図られた一方で、利用者は減少傾向にあるといえる。これは、子ども図書室開設当時には大学のある甲府市北部に絵本や児童書をそろえた子どものための図書室がなかったことから地域の需要が大きかったが、2012年には甲府駅北口に県立図書館が開館し、乳幼児向けのコーナーには十分な蔵書がそろえられていることや、駅に近くまた駐車場を有したその立地の利便性などが影響していると考えられる。

また、近年は学部改組に伴う時間割の変更などが影響し、平日に子ども図書室の開室を担当できる学生が少なくなり、開室日時の変更や開室日数を減らすなど模索しながらの運営が続いており、こういった点も利用者減少に少なからず影響していると思われる。開室日時については、開設当時は月曜午前と水曜・土曜の午後となっていたが、月曜午前の開室は授業のために担当できる学生がいない状況が続き、図書館職員の協力を得て開室することもあった。この開室スケジュールは、開設当時に「月曜日は就学未満児をもつ保護者の方の集いの場、水曜日は学校帰り、幼稚園帰りの親子が寄りやすく、土曜日はゆとり教育による休日が始まったことを受けてゆっくりと読書を楽しむ場、遊びの場」（金澤・進士，2003）となることを目指して決められたものであった。そのため、午前開室日を維持できるように努めたが、曜日を変更しても午前開室を学生が担当することは難しく、2015年4月からはすべて午後からの開室とした。この点については、月曜日を閉室とし週2日の開室とする案もあったが、子ども図書室の開室を楽しみにしている子どもたちのために、時間帯を変更しても開室日は維持したいという学生の思いがあった。

しかし、現実には年間の開室日数そのものが減少しており、鳥海・塚越（2013）では年間平均120日前後であったが、昨年度には72日となっている。これは開室を原則として週3日としているが、授業や教育実習等の都合があり、学生が確実にシフトに入れる日を開室日とし、直近や当日になっての閉室がないように努めた対応が影響している。開室日数は減ってはいるが、学生はクリスマス会などのイベントを開催し、来室する子どもが楽しい時間を過ごせるよう努力を続けている。開設当時とは大学や学生の置かれている状況が変化したこともあり、運営には難しい面が出てきている。しかし、「いま、子ども図書館が増えている」の特集では、全国で初めて大学につくられた子どものための図書室である鳴門教育大学附属図書館児童図書室とともに本学の子ども図書室が紹介されているように、地域に開かれた子ども図書室の存在意義は対外的に見ても決して小さくない。また、学生が運営を担っているという特徴は、他の子ども図書室にはない独自の魅力であり（岩田・マユウ，2016）、利用者もこの点に利用する価値を見出している可能性が考えられる。そこで、本稿では子ども図書室利用者に利用状況や利用目的についてたずねることを通して、その魅力と今後の展望について考えたい。本学には、大学の敷地内にある子ども図書室から徒歩10分ほどの距離に山梨大学教育学部附属幼稚園（以下、「附属幼稚園」とする）があり、その園児と保護者は、半日保育の水曜午後に子ども図書室を利用することが特に多い。そこで、広く子ども図書室を認知していると思われる附属幼稚園児の保護者を対象に、子ども図書室の利用状況や利用目的などについてたずねる質問紙調査を実施し、利用者がどのような点に子ども図書室の魅力を感じているのかを探ることを本稿の目的とし、得られた知見を今後の活動の更なる充実のために役立てたいと考える。

Ⅱ. 方法

調査対象：山梨大学教育学部附属幼稚園児の保護者に、幼稚園のクラス担任を通して調査用紙を配

布・回収した。回収できた質問紙の総数は71人分であり（内訳は年少児28人，年中児19人，年長児24人，質問紙の回収率は73%），以下ではこれを分析にかけた。調査時期は2015年4月であった。質問紙の構成：質問紙はA4両面刷り1枚で，表面には利用頻度などについて選択式で回答を求め，裏面は子ども図書室の良さなどについて自由記述方式で回答を求めた。調査項目を表1に記す。

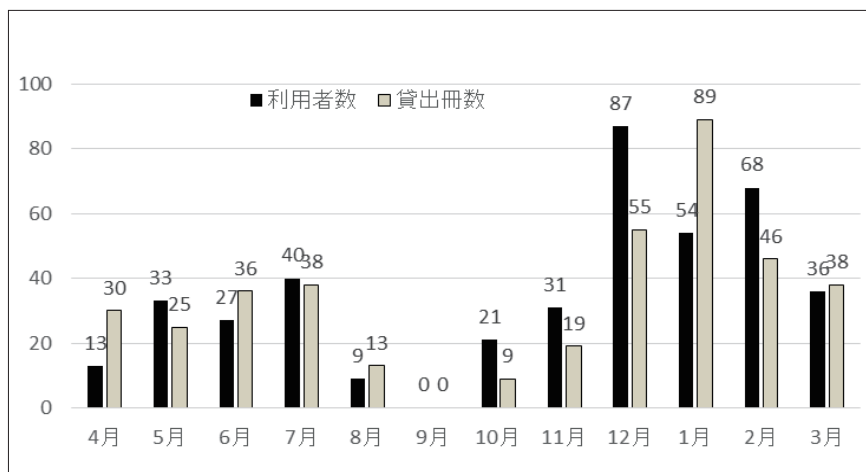


図1 2018年度月別利用者数および貸出冊数

表1 調査項目

設問1. 子ども図書室をどのくらいの頻度で利用されていますか。

(1. 開館日は，ほぼ毎回 2. 週に1回程度 3. 月に1回程度 4. 2～3か月に1回程度
5. 半年に1回程度 6. 利用したことはない)

設問2. ①子ども図書室を利用するお子さまの年齢について教えてください。【複数回答可】

(1. 0～3歳 2. 4～6歳 3. 小学校低学年 4. 小学校高学年 5. その他)

②お子様に同伴される方はどなたですか。【複数回答】

(1. 母 2. 父 3. 祖父 4. 祖母 5. その他)

設問3. 子ども図書室の主なご利用目的は何ですか。【複数回答可】

(1. 本を借りる 2. 本を読む 3. 工作 4. イベント参加 5. ボランティアによる読み聞かせ 6. その他)

設問4. 子ども図書室の良さは，どのようなことだと思われますか。

設問5. 子ども図書室を利用するに当たり，改善して欲しいことはありますか。

設問6. 今後，どのようなイベントを開催して欲しいですか。

設問7. 置いてほしい本など，図書に関するご希望があれば教えてください。

その他. 上記以外にお気づきの点やご希望などありましたら，ご自由にお書きください。

Ⅲ. 結果と考察

1. 利用状況

設問1では、子ども図書室が附属幼稚園児の家庭にどの程度利用されているのかを把握するために、利用頻度についてたずねた。利用したことのある人数は、年少児では28人中4人（14%）、年中児では19人中12人（63%）、年長児では24人中18人（75%）であり、年少児の家庭にはほとんど利用されていなかった。調査実施時期が4月であったことを考慮すると、附属幼稚園に初めて子どもを入園させた年少児の保護者は、まだ子ども図書室を知らなかったと考えられる。これは質問紙の最後に設けた自由記述欄に、「子ども図書室を知らなかったが、これから利用したい」という意見が見られたことから裏付けられる。ここから、年度当初には子ども図書室の存在を知ってもらう活動が課題となってくることがわかる。一方で、年中児と年長児の家庭では子ども図書室を利用した経験が6割以上となっており、多くの家庭に利用されていることが確認できた。

また利用頻度については、週に1回が6人、月に1回が12人、2～3か月に1回が5人、半年に1回が11人であり、家庭によって様々である。しかし、週に1回と月に1回を合わせると利用者の半数近くが月に1回以上子ども図書室に来室していることから、利用頻度は決して低くない。本研究では貸し出し状況についてたずねる項目を設定していないため確認することはできないが、本の貸し出し期間が3週間ということもあり、来室時には本を借り、返却のために来室した際にまた本を借りていくというサイクルができて利用者が一定数いることが推察される。

次に、設問2では子ども図書室を利用する子どもの年齢についてたずねた。附属幼稚園児だけでなく、その兄弟姉妹も一緒に利用している可能性が考えられたため、この設問は複数回答可とした。その結果、幼稚園在園児の年齢にあたる4～6歳が最も多く45人、次いで0～3歳が26人、小学校低学年が6人、小学校高学年が2人であった。これは附属幼稚園に通っている子どもだけでなく、園児の兄弟姉妹が一緒に利用している家庭があることを示唆している。子ども図書室の蔵書は、乳幼児向けの絵本が中心ではあるが、小学生が楽しめる児童書や調べものができる図鑑などもそろえているため、小学生以上も利用することが可能となっている。また子ども図書室は山梨大学附属図書館（以下、「大学図書館本館」とする）とは別の建物になっており、配架スペースとは別に読み聞かせのための部屋もある。そのため、読み聞かせしたり話をしながら本を読み進めたりすることができるという点が、小さい子どもを連れての利用を促しているものと思われる。

また、設問2では子どもに同伴する人についてもたずねた（複数回答可）。その結果、母親が63人、父親が7人、祖父母が4人であった。附属幼稚園が半日保育の水曜日には、特に附属幼稚園児の利用が多いことから、降園の際に母親が子どもを連れて子ども図書室に立ち寄ることが多いと考えられる。

2. 来室目的・魅力

設問3では子ども図書室の利用目的について、「本を借りる」「本を読む」「工作」「イベント参加」「ボランティアによる読み聞かせ」「その他」の項目から選択回答を求めた（複数回答可）。その結果、「本を借りる」が39人、「本を読む」が39人、「工作」が27人、「イベント参加」が10人、「ボランティアによる読み聞かせ」が3人に、「その他」が3人であった（表2参照）。どの年齢も「本を借りる」と「本を読む」を挙げる保護者が多く、子ども図書室で本に親しんでいることが確認できる。また、「工作」は年中児と年長児に多く見られたことから、実際に子ども図書室に来室する中で工作材料・用具が準備されていることを知り、来室の楽しみに加わったものと思われる。「その他」は、「お勧めの本を探しに、また、新しい本の発掘」、「お友達と一緒に時間を過ごす」、「安全な遊び場所とし

での利用」であった。「お勧めの本を探しに、また、新しい本の発掘」は「本を借りる」「本を読む」と共通の読書活動ととらえることができるが、「お友達と一緒に時間を過ごす」や「安全な遊び場所としての利用」はコミュニケーションスペースとして認識・活用されていることがうかがえる。これは、設問4の子ども図書室の良さをたずねた質問に対する回答と共通するものであるため、次の設問4において詳しく考察することとする。

設問4では、子ども図書室の良さについて自由記述形式で回答を求めた。記述なしは29名で、その多くが年少児の保護者であった（記述なしの内訳は、年少児17名、年中児5名、年長児7名）。設問1においても年少児の保護者は、子ども図書室を利用したことがある人数が少なかったことから、子ども図書室を利用したことがないためその良さについて回答することができなかったと推測される。また、年中児と年長児の保護者では、良さに関してそれぞれ14人（74%）と17人（71%）の記述が得られていることから、子ども図書室を利用したことのある保護者は、子ども図書室に何らかの魅力を感じていると考えてよいだろう。

良さに関する記述を整理すると、「施設・環境」に関するものが28人（記述ありの66%）と最も多かった。次いで、「工作」が11人（26%）、「学生」と「図書」に関するものがそれぞれ10人（26%）、「交流」に関するものが5人（12%）、「その他」が9人（21%）であった（表3参照）。最も多くみられた「施設・環境」に関する内容を詳しくみてみると、特に「子どものための図書室であるため、他の利用者に過剰に気を遣うことなく、子どもとリラックスして読み聞かせをしたり遊んだりできる」という内容が多かった（14人）。また、「大学の敷地内にある安全性」「清潔さ」「目の行き届くほど良い広さ」も挙げられ、子ども図書室は保護者が子どもとともに安心して利用できる空間となっていることがわかる。近年子ども向けコーナーを設置した図書館が増えてはいるが、図書館という性質上、その場で読み聞かせをしたり、子どもが走り回ったり声を出したりすることで他の利用者に迷惑をかけることのないように、保護者は気を配る必要がある。その点、子ども図書室は大学図書館本館とは独立した専用の建物であり、利用者は幼児期の子どもとその保護者が中心であるため、お互いに気兼ねなく過ごすことができているのだと思われる。このように読書活動の場としてだけでなく交流の場としての機能を有していることを考えると、今後も子どもの声や活動によって生じる音についてはある程度の寛容さを持って運営していくことが必要であると思われる。

「施設・環境」に関する記述の次に多かった「工作」は、設問3においても利用の主な目的として挙げられていた。具体的には、「集中力が続かない小さな子どもにとって、工作をしたり本を読んだり様々な活動ができることは魅力的」「工作ができることで、子どもが自然と本と触れ合える」「他の図書館ではイベントの時しか工作などができないが、いつでも楽しく工作ができる」などの記述がみられ、小さな子どもにとっては、本を読む・借りるという図書館本来の機能だけでなく、工作ができるという点が図書室に通う楽しみを増やし、自然と本に親しむ機会になっているのだと思われる。

「学生」に関する記述は、いずれも学生の対応が優しく親切であると記述されている。子どもが学生と遊ぶなどの触れ合いを楽しみにしていることや、学生が貸し出しを担当することで子どもが本を持ってカウンターに行きやすいことなどが良さとして挙げられていた。子ども図書室は、利用する子どもにとっての社会性を育む場所として保護者に認識されていることがうかがえた。この点は学生にとっても、教育実習などを通して知る幼稚園にいる時の子どもとは別に、保護者と一緒にいる時に見せる表情を知り得るよい学びの場となっている。

「図書」に関する記述は、他の図書館においては館内閲覧のみになっていることの多い図鑑を借りられることが魅力として挙げられた。また、定期的に新しい本が入るため、家庭で購入するだけでは出会わせることができないたくさんの本があることも魅力としてとらえられていた。子ども図書

室の開設のために視察をした鳴門教育大学附属図書館児童図書室には蔵書は、2014年時点で11,840冊あり（国際子ども図書館を考える全国連絡会，2014），また2012年に甲府駅北口に開館した山梨県立図書館の児童向け図書の蔵書数は現在115,026となっている（山梨県の図書館2018－山梨県図書館白書－，2018）。これらと比べると本学の子ども図書室の蔵書数は4,685冊と決して多くないが、定期的に新しい本が入り、それらはわかりやすいように新書コーナーに配架されるため、保護者にとっては魅力を感じる要因となっているのだと考えられる。

また、「交流」に関する記述は、「同じくらいの年の子ども達が一緒に本を読んだり，工作したり，自由に遊べる」や「子どもたち同士が交流できる」という子ども同士の交流に関する記述と，「同じ子育て期で周りの方と共有できるところ」や「親同士のコミュニケーションの場にもなりありがたい」という保護者同士の交流に関する記述とがみられ，子どもと大人の両方にとってコミュニケーションスペースとなっていることがわかる。「施設・環境」で他の利用者を気にしないで交流できることが良さとして挙げられたことも共通するが，子ども図書室が大学図書館本館とは独立した建物で，子どものための施設となっていることがこのような魅力を生み出したものと思われる。今後も読書活動の場としてだけでなく，コミュニティスペースとしての活用されることが予想され，この点を支援する運営を考えていくことが必要であると思われる。

「その他」はいずれも上述した内容に準ずるものであり，子ども図書室は子どもも大人もリラックスして読書活動をすることができ，なおかつ利用者同士がコミュニケーションをして楽しむことができるスペースともなっていることが確認できた。

3. 改善を望む点と今後の課題

設問5では，子ども図書室に改善を望む点についてたずねた。最も多かったのは開室日時に関することで（11人），他の公設図書館のように開室日時を増やしてほしいという意見である。子育て支援においては「行きたい時にいつでも利用できること」は保護者のエンパワーメントやレジリエンスを高めていくために重要な点であり，多くの子育て支援施設は常設拠点であることにこだわって開設されている（今井・伊藤，2017）。子ども図書室は大学の地域貢献としての子育て支援をその目的として開設されたとはいえ，同時に学生の実践的学習の場でもあることから，子育て支援を最優先にした運営をすることは難しい。しかし，開室日時に関するこの要望は，利用者は子ども図書室で今以上に多くの時間を過ごしたいと思っており，乳幼児とその保護者の居場所という子育て支援的な役割を果たしている証拠であると考えられる。「I. 問題と目的」で述べたように，時間割の変更などにより開室を担当できる学生が減っている現状を考えると期待に沿うことが難しい問題ではあるが，子ども図書室の運営の在り方や携わるスタッフの充実などと合わせて検討していくべき課題であると思われる。

次に，工作をする道具（折り紙，新聞紙，糊など）を増やしてほしいという意見が挙げられ，この理由は子どもが楽しみにしている活動であるため，没頭できるように充実させて欲しいというものである。その他には，靴の収納スペース，ベビーカーを置くスペースなど施設のハード面に関する要望であった。また，1名ではあったが，本来は保護者自身が気を付けるべきことという但し書きの上，利用者のマナーが悪いため子ども図書室の学生ボランティアにも注意をしてもらいたいという意見もあった。この点は，子ども図書室が読書スペースでもあり，工作などを含むコミュニティスペースでもあるという2つの機能を有していることも関係し，どこで線引きをして注意を促していくのかという点で難しい課題である。運営に当たっている学生ボランティアも以前から感じている対応面での難しさでもあるため，今後，子ども図書室がどのような役割を果たしていくかという方向性と合わせて検討していく必要があるだろう。

次に設問6では、これまで企画したイベントがどのように受け止められているか、また今後どのようなイベントを企画することが利用する子どもの楽しみになるのかを考えるために、どのようなイベントを希望するかについてたずねた。その結果、工作が13人（折り紙も含めると16人）となり、子どもができる・親子でできる製作活動を希望していることが分かった。折り紙については1度の来室につき2枚という制限はあるが、通常の開室日にも自由に使用することができ、工作やお絵かきをしたりすることもできるようになっている。また工作活動は学生が子どもと一緒にこなうことが多い。このことから、何か特別な企画というよりも、日常の開室での工作活動の延長・発展としてのイベントを望んでいると考えられる。また、紙芝居や絵本などの読み聞かせを希望する人数も多かった（13人）。その他には、イベントの内容は特定されていなかったが、学生と触れ合えるイベントと書いている保護者もあり（2名）、子ども図書室の魅力は学生ボランティアにあることがここでも確認された。また、本の選び方、仕掛け絵本の使い方（読み方）などを希望する記述が得られた。これまでも学生が誕生日会（子ども図書室の開設月である5月に実施）やクリスマス会などで、子どもとできる手遊びや折り紙のイベントを開催してきた。上記に記した多くの記述には「今まで通り」「今までもあったように」という断り書きが見られたことから、目新しいイベントが望まれているわけではなく、これまでおこなってきたイベントを継続・充実させていく方向で考えていくことが望まれているものと思われる。

設問7では、置いてほしい本など、図書に関するご希望についてたずねたところ、16人から回答が得られた。その内容は、親・大人向けの本や雑誌を置いてほしいという希望が4人、お勧めの本を教えてほしいという希望が2人あった。その他は、いずれも1人ずつで、子ども向けの料理の本、日本と世界の歴史、伝記、子ども向けの洋書などを希望していた。他の公設図書館のように多くの蔵書数をそろえることは難しいが、様々な研究者がいる大学という研究機関の利点を生かし、特徴のある選書をおこなったり、お勧めの本を紹介したりするなどし、図書の点でも子ども図書室を利用する利点・魅力を広げていくことは可能であると思われる。

本稿では、子ども図書室の主な利用者である附属幼稚園児の保護者を対象に質問紙調査を実施し、子ども図書室に利用者はどのような魅力を感じているのかを探った。その結果、図書を読んだり借りたりという本に親しむ活動以外に、運営に携わる学生ボランティアとの交流や工作活動、また子ども同士・大人同士のコミュニケーションスペースとしても活用され、その点に魅力を感じている利用者が多いことなどが示された。また日常的な利用がよりしやすくなることや、学生ボランティアによる工作や読み聞かせを中心としたイベントなどへの希望が多く、日常の子どもたちの生活の中に自然に位置づく存在であることを求められているということも明らかになった。一方、子ども図書室の存在を知ってもらう活動が必要であることも示された。

今回の調査で得られた子ども図書室の魅力や改善を望む点について、関係教職員と学生ボランティアで共有し、大学にある子どものための図書室としての魅力・役割について考えながら、今後子ども図書室の充実のために役立てたい。また、今回の調査対象は附属幼稚園児の保護者であったが、子ども図書室は広く大学外に開かれた施設であるため、広く利用者の声を聴く努力を続けていきたい。

表2 設問3で選択された利用目的（複数回答）

	年少	年中	年長	合計
1. 本を借りる	15	8	16	39
2. 本を読む	15	12	12	39
3. 工作	3	11	13	27
4. イベント参加	3	2	5	10
5. ボランティアによる読み聞かせ	2	0	1	3
6. その他	0	3	0	3

※数字は回答者数。

表3 設問4で子ども図書室の魅力として挙げられた記述内容

分類	記述数	記述例
施設・環境	28(66)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どものための図書室なので、大声を出したりすることなどに神経質になりすぎなくていい。 ・大人の読書や勉強の邪魔になることを気にしないで利用できる。 ・子ども専用の建物として独立しているので、どうしても音をたててしまいやすい子どもでも気軽に連れて行ける。 ・大学の中にあるという立地環境の良さ。 ・適度な広さなので目が行き届く。
工作	11(26)	<ul style="list-style-type: none"> ・本を読む以外に工作や折り紙もできる所。 ・本を読むことだけでなく、折り紙や画用紙で遊ぶことができるため、子どもがとても喜んでいる。
学生	10(24)	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生が親切に色々な事を教えてくれる。 ・運営が学生さんたちであるところ。子どもたちにとっても優しい。子どもたちもお兄さんお姉さんがいることを喜ぶ。 ・優しい大学生のお兄さん・お姉さんがいて、子どもの相手をしてくれるところ。
図書	10(24)	<ul style="list-style-type: none"> ・図鑑が借りられる。 ・定期的に新しい本が入っていて借りられるところ。 ・家では買ってあげられない本をたくさん読んであげることができる。
交流	5(12)	<ul style="list-style-type: none"> ・工作を友達と一緒に楽しめること。 ・同じくらいの年の子ども達が一緒に本を読んだり、工作したり、自由に遊べる。 ・親同士のコミュニケーションの場にもなってありがたい。
その他	9(21)	<ul style="list-style-type: none"> ・生活パターンがはっきりしてきたので、利用できる日時がわかってきた。

※数字は回答者数。()内は記述があった人数に対する割合。

IV 引用文献

- 秋山麻実（2002）「山梨大学附属図書館子ども図書室」における学生ボランティア活動の展開．山梨大学教育人間科学部紀要，Vol. 4，No. 2，158-169.
- 今井昭仁・伊藤篤（2017）神戸市の大学等が運営する地域子育て支援拠点事業の利用状況と展望 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，第10巻，第2号，135-140.
- 岩田英作・マユーあき（2016）大学附属児童図書館の展望-6 館の比較を通して- 島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要，Vol. 54，183-192.
- 児童図書館研究会（2012）年報こどもの図書館 2007-2011 2012年度版 日本図書館協会. 462-472.
- 金澤知里・進士佳容子（2003）子ども図書室1周年を迎えて．山梨大学附属図書館報やまなし，Vol. 1，No. 1，P. 2.
- 国際子ども図書館を考える全国連絡会（2014）いま，子ども図書館が増えている：その実際のすがた（7）大学の中に作られて子どもたちが訪れる：『鳴門教育大学附属図書館児童図書室』（徳島）と『山梨大学附属図書館子ども図書室』（山梨） 国立・国際・子ども図書館：国際子ども図書館を考える全国連絡会会報（36），12-15.
- 鳴門教育大学附属図書館児童図書室（2006）地域に開かれた鳴門教育大学の児童図書室-20年のあゆみ1987～2006
- 鳥海順子・塚越奈美（2013）「山梨大学附属図書館子ども図書室の現状と課題」．山梨大学教育人間科学部紀要，第14巻，279-287.
- 山梨県の図書館2018- 山梨県図書館白書（2018）
<https://www.lib.pref.yamanashi.jp/librarian/hakusho/8.html>（2019年10月1日アクセス）